

かくして桜は闇になる

西松布咏

「卯の花が咲くと桜は闇になる―これからの季うつろいを先人はこう川柳にした。十年間続いた『連塾』がひとまず幕を下ろすという。松岡正剛氏の塾は私にとつて桜吹雪だった。だから着物姿で背筋を伸ばして日本をまるごとからだで感じた。美しさと儂さと全体と部分を見事な編集とあの声で時に鋭く、時に切なく心に降り積もり日本の魂を大切にしたいと思った。桜は散り、花も紅葉もなくなつたとき、闇の中から何が現れるのだろうか。最後の授業を心して待ちたいと思う」

このメッセージを送つたのが四月末。時は過ぎゆき白い花は七色の紫陽花に変わり、机に向うわが部屋窓から見える東京タワーは皐月闇にまぎれるかのように、東京スカイツリーに名所をゆずり、すでに面影の塔となつてしまつた。

五月二十六日青山スパイラルホールでめくるめく過ぎていった八時間の砂時計を倒して、今その一滴を少しづつ懐かしんでいる。

連塾は深くて遠い伝統音楽の道をとぼとぼ歩く私の足元をかすかに灯してくれる蠟燭のような存在だった。時にはあまりに難しく自分の浅学に愕然となりながらも松岡氏の包みこむような低音の名調子にうつとりと音楽を聴くように身をゆだねたものだった。今回のテーマ『松岡正剛・本の自叙伝』はヴァレリカ

ら始まり、白川静著の『さいの国』からでは「音」とはひたすら祈つて神の訪れを待つこと。闇の中で神の声を聞くことを音連れといい、やがて音楽が生まれてきたとの説明にまさしく盲目の検校法師の唄『地唄』は「うつつして生まれてきたのか・・・といつも苦しむ間合いの難しさの謎が解けたような喜びを感じた。この頃は三味線とともに唄っている自然と目を閉じて闇の中に身を置くことが多くなつてきた。古来からあまりに理不尽な災害や出来事が多い日本風土だからこそ伝統芸能はますます深まり難解になつていったのかも知れない・・・と歳を重ねるごとに思うようになった。



能楽もそうなのだ。この世の無念が亡霊となつて舞台で語り舞うことによつて魂が慰められ、又あの世に戻つてゆくという複式夢幻能も儂い土壌で生き抜いてゆく為の日本人の心の鍵穴だったのだと結ぶ松岡氏の世阿弥の話は、縦横無尽にシエークスピアのリヤ王の悲劇へと様々な分野に展開してゆく。そして最後は夏目漱石の『草枕』へと・・・これこそが「日本という方法」であり、心の奥底にあるものをたぐりよせたいというメソッドが潜んでいると氏

は語つた。なんとその本をこよなく愛したのがピアノ二ストのグレン・グールドだという。

六月三日よんだ薄日の差す日曜の昼下がり、彼の弾く『ゴールドベルク変奏曲』を無性に聞きたくなり必死で押入れに積んであるCDを探し出した。十七年前のはるか昔、北米マサチューセッツ州・アマハースト大学に招かれ三味線音楽のゲスト出演をした事があつた。私の演奏を「渋い！」と評してくれた学生が同じような表現方法に聴こえると、アン・トン・ウエーバーの前衛音楽やグレン・グールドのピアノを教えてくれたことを思い出したのだ。日本独特の三味線と唄のずれや微妙な間の表現を異国のひとが感じてくれた嬉しさと、あの時の古い校舎を静かに包んでいた闇の匂いが甦り、なつかしさで胸がぎゅんと痛むようだった。

学生の頃、現実の恋の行方に夢中で読み捨てたままに終わった『草枕』

歳月を経た今、ゆつくりとグレン・グールドのピアノを聞きながら読み返してみようと思う。

連塾の最終章は桜吹雪となり闇となつて早くも私の心をさまざまに妖しく霍乱し始めている。

KARAと鯉と初夏の彩

―日本橋薫風かつを会鑑賞記― 福岡俊弘

冒頭から邦楽とは遠い話で恐縮だが、先日、熱心な友人に誘われて、KARAという韓流グループのコンサートに行つてきた。あの、タララタララ♪と腰を激しく振つて踊る、あの女性五人組である。場所は原宿の代々木体育館、ざっと一万人収容の会場は、スタンド、アリーナ席ともに満席。男性客がほとんどだろうと予想したが、半数が女性。しか

も年齢が若い。制服姿の女子高生もあちこちで見かける。手には一様に、KARAのオフィシャルグッズである、ハート型のペンライト。

コンサートはド派手な演出で、大いに盛り上がった。が、印象に残ったのは、ある種の「ゆるさ」だった。日本のアーティスト（欧米もだけど）のそれだと、フィナーレに向けてたたみ掛けていくような構成をとるのだが、KARAにはそれが無い。三曲歌って踊ったら二分ほどのブレイク。実はそれが、彼女たちの着替えの時間。観客も、腕を頭上で振りながらの声援ではなく、胸の前で小さくリズムをとる。そんな感じ。

気がつけば、高いカロリーが必要なコンサートばかりになった日本にあつて、この「ゆるさ」は、誰もが安心できる場になっていったようだ。韓流のもたらし「間」が安心できるなんて、なんて皮肉めいた話だろう、と思ったのだが、元々、日本に最初にやってきた音楽は、高麗楽などの三国音楽だったことを思えば、さほど不思議なことでもないのかもしれない。

さて、かつをの話である。鯉のほうは韓流ではなく日本海流、黒潮に乗って日本にやって来る。「目には青葉 山時鳥 初松魚」という山口素堂の句はあまりに有名だが、元の句は「目に青葉」ではなく「目には青葉」と字余りになることはあまり知られていない。つまり、目には青葉、耳にはほととぎす、口には初がつお。ほととぎすの鳴き声が聞こえ、樹々に青葉が茂る季節になったので、初鯉が食いてえなあ、と。

鯉は、昔から一般に食されていたのだが、江戸の「粋」から、初がつおが人気を呼び、この時期の鯉はけっこうな高値となっていたらしい。將軍様へ献上の品でもあったというから、庶民にとつては高嶺

の花。それでも、「女房子供を質に入れてでも」と言われたほどで、日本人の初物好きは、ワインのボジョレーヌーボーの例を見るまでもなく、昔から筋金入りだったようだ。

この鯉と同様に、北上する海流に乗って日本に到来したものに三味線がある。弦楽器のルーツ自体はペルシアあたりにあつて、そこから陸の道（シルクロード）と海の道の二手に分かれて出発する。シルクロードを通ってきたものは朝鮮半島を経て、唐楽や高麗楽などの古代音楽とともにいち早く大和国にもたらされ、四弦系の琵琶となる。

一方、海のシルクロードのほうは、インド、東南アジアを経由して中国・福建省のあたりにたどり着き、三弦（サンシエン）となる。そこから琉球、奄美を経て、大阪・堺に到着。あつという間に日本的な編集がなされ、三味線が成立するのはご存じの通り。楽器は暖流に乗って、節は半島から、つまり韓流に乗って。

ということでお題が揃ったところで、本題の、日本橋薫風かつを会。の話に移りたい。長い前置きですいません。



布咏師匠の最初の演目は小唄「目に青葉」。松魚売りの売り声に、いきなり初夏が薫る。日本橋を忙しなく行き交う物売りたち。その中を颯爽と闊歩する髪結新三の情景が浮かぶ。二曲目、場所は吉原へと移動。「留めても帰る」「五月雨に池」と、男心と女心が交差する。

そして端唄「宇治茶」。実はこの唄の意味がまったくわからなかったのだが、昔は女性（遊女）のごことをお茶に例えていたという話を以前に聞いて、胸にストンと落ちた。「色も香もある好いた同士」に「濃い（恋）茶」。気がつけば、恋と色の世界にどっぷり。師匠の声は艶を増し、「一声は月」へ。「一声は月が啼いたか時鳥」。これがおそらくこの先の伏線。

後半は小唄「中洲河岸」、新内「浜町河岸」と続く。隅田川の情景に誘ったあと、純愛悲劇を切々と唄う師匠。この胸を刺すような展開をどう表わせればいいだろう。が、次の曲はなんと「勝ち名のり」。大川を渡って両国へ。現の世界に揺り戻され、まさに「ホッと吐息を一つ」。

小唄「卵の花」で再びホトトギスの声と初夏の景色へ振って、最後は富本節「松魚売勇商人」。「かつおかつおと売り声も……」。ここまで来たら、もう松魚をいただかないことには、ね（笑）。いや、本当に見事な構成でした。

松魚づくしの料理は、マンダリンホテルの高層階へと会場を変えていただいた。布咏師匠の唄の余韻に浸りながら、眼下に東京の夕景を従えての食事は、格別のものだった。この高層階の男子トイレからは、東京の新名所、スカイツリーが眼前に見える。あの巨大な塔の下で、今でも松魚売りの声が……そんな想像をめぐらすと、日本が育んできた文化もいいものだな、と素直に思った。

西から半島を経て伝わった音楽。松魚とともに暖

流に乗ってやってきた楽器。それらが日本でひとつに合わさり、幾層もの編集を経て三味線音楽となった。西からの流れ、松魚の流れ。西と松で西松流。初夏の三題噺、おあとがよろしいようで。

## 「住めば都、唄えば都」

川崎 隆章

赤坂。浅草。そして半蔵門。

美紗の会はこのところ、江戸城周辺を西へ東へと動き回っています。

今回の会場であったグラウンドアーク半蔵門は、今世紀になってから開業した場所で、音響も空調も抜群なものでした。赤坂の時も浅草の時も「次もこういう会場でやれるといいわネ」なんて言っていました。いざ集まってみれば今回の会場も使いやすい何より「唄が自然によく響く」というのが歌う側にも聴く側にも心地良いものでした。

しかし、われわれのヤセガマンはいかがなものでしょう。

壁一枚向こうには満開の桜。どんぴしゃりの週末。一番のお日和。

そんな日に、窓のない会場で唄っている。よほどわれわれ、唄が好きなんですなえ。

住めば都。

唄えば都。

美紗の会には、唄えば都。

どんなところでも生きてゆける。何があっても唄って過ごせる。

昨年の震災や豪雨・豪雪によって、われわれにとっての「母なる大地」は、決して永遠ではないのだ、ということを思い知らされました。

では、それに対するわれわれ「大地の子」の答えは「唄えば都」の一言に尽きます。もちろんその言葉の中にはちよっぴりヤセガマンもあるのですが、それは唄の薬味。以前、忠詠先輩と「たとえ日本がどうなつたって、日本人は世界じゅうどこかで三味線抱えて歌ってますよ」という話をしたことを思い出しました。

たとえ、この列島に何かあって、大陸に集団移住しようとも、月面や火星に移住しようとも、必ず「唄おうヨ」という人が現れ「じゃ、弾くヨ」という人が応え、それを見ていた人が「私にも、教えてよ」「じゃ、やってごらんよ」と言い始める。江戸のDNAはこうして受け継がれて来たんでしょね。



もちろんこれは日本人だけの特許でも何でもないのですが、日本人は比較的「こだわるようでこだわらない」軽い民族性がありますから、おそらく百年くらい先には、ガラス張りの宇宙船の中であって、おそらく会を開いてることでしょう。

そして「ああ、地球はそろそろチェリーブラッサムズの季節ね」なんて言いながら、想いを、江戸や明治、あるいは中世・上代にまで里帰りさせてゆく。一方、目の前の窓には極彩色の雲をたなびかせながらゆっくりと舞いつづける花魁道中のようなガス星雲・高尾太夫、恒星の光を受けて渋い色に濡れている惑星・蜷川、いますれ違ったのは宇宙船・後白河。宇宙の七福神を巡りながら、木星正宗の杯を手に、母なる地球の桜を想い浮かべ、心を江戸に通わせる。こんな未来も来るのでしょうか。

いや、この景色を想像した時点で夢の世界は実現しているのだと思います。

そう。砂磨りの壁一枚向こうに目を見張る素晴らしい景色があるのです。今年の、おさらい会の日のあの満開の桜のように。

見るに及ばず、確かめるに及ばず。

人がいて、唄と糸と踊りがあってそして、少しお酒があれば十分だと思うのです。

お酒が少しで済むとは思えませんが(笑)。

## 「三つ子の魂」

松本 希子

私と布詠師匠との出会いは、昨年九月に東京文楽会と大阪の粋の会が一緒となり、現在の粋の会の代表幹事である藤澤優様からのご紹介でした。私にとつて師匠の演奏は神田明神で開催された「江戸唄と落語の会」が初めて、その後、京都でのコンテンポラ

リーダンスとの共演「アジール」も観ました。そして今回は、一月二十八日に東京の港南区民センターで催された「江戸唄と落語を楽しむ参り―江戸春寿噺」にスタッフ要員として大阪から馳せ参じ、春風亭正朝師匠の「文七元結」、布詠師匠の「山谷の小舟」で始まる江戸唄の数々、上方唄とは又違う味わい深い音との出会いを楽しませていただきました。この七月十四日(土)には、粋なおはなし―江戸・上方粋くらべ」と題して、再び師匠にお世話になります。このように、どんな形であっても魂の音色により添える私は幸せ者だと常々感じています。

ところで、私は佐賀県唐津市で生まれ、九才から大阪で暮らしています。唐津の記憶といえば、海の香りと唐津くんちのお囃子の音色です。二才になっただけの頃から髪を結って、着物をきせてもらい父が曳く山車に乗せてもらうことが何よりの楽しみでした。笛と太鼓と鐘で綴られる祭り囃子は、唐津っこ、の魂の鼓動のようなもの。唐津を離れて長い時間が経つ私ですが、くんちの囃子を聞いただけで心臓の鼓動が高鳴ります。幼い頃に刻み込まれた音というものは一失忘れない。そんな私には、くんちの囃子とともに刻み込まれた三味線の音色がありました。

唐津を離れ大阪で暮らす様になり、板東玉三郎丈の美しさに魅了されて高校一年から歌舞伎を観るようになり、二十代には能、狂言、三十代に入り再度歌舞伎として文楽と興味の幅が広がっていき、二〇〇八年の八月には、羽田澄子監督作品「歌舞伎役者十三代目片岡仁左衛門」の全六部作の自主上映を歌舞伎好きの仲間と開催し、二〇一〇年の五月は大阪で粋(すい)の会を立ち上げ、上方唄・上方舞を中心とした鑑賞会とワークショップ「地歌と舞の会」を開催しました。これらの企画と活動は上方という文化が色褪せていくのが、もったいなく

感じていたことがひとつのきっかけでした。それともうひとつ、祭り囃子とは違う記憶に刷り込まれた「三味線」の音色に知らず、知らずに導かれていくのかもしれない。

私が生まれた唐津の家の隣には大きなお屋敷があり、いつも三味線の音色が聞こえていました。生家には五才までしか暮らしていませんでしたが、その奥様には大変かわいがっていただいていた様です。私は長唄のお稽古をつけてもらったのだから勝手に思い込んでいましたが、母によると浪曲のお家元だったそうです。私が母のお腹に宿ったときからお隣の三味線の音を聞いていたことになり、その影響なのか、三味線の音色が大好きですし、とても惹かれます。

三味線が登場しない能では、囃子と謡にとっても惹かれます。囃子は祭り囃子に通じる共鳴感を私が勝手に感じるのと、謡は母方の祖父が縁側の椅子に座って謡の稽古をしていたことに影響されているのだでしょう。三つ子の魂百まで、こう書いているとまるで邦楽漬けの人生を送ってきたように思われるでしょうが、中学の頃からハードロックを聞き、ジャズもクラシックも好きでコンサートにも出掛けていました。ただ、いま自分の魂に一番強く響く音が古典といわれるジャンルに属している音であり、自らのアイデンティティを掘り起こすための音色で、それにまつわるストーリーが歌舞伎・文楽・能狂言であり、地歌、上方唄なのです。まだまだ私の知らないストーリーはたくさん存在し、これからも音でつながるストーリーをきくと探し続けることでしょうか。そんな三つ子の願いは、死ぬまでに少しでも三味線が弾けるようになること、しかしこの願いはいつ叶うことになりそうですでしょうか。だってまだお稽古すらはじめていないのですから(笑)。

## 「姨捨」と「楢山節考」

本郷公基

去る五月一日、東海道線の辻堂駅に隣接して新しくできた巨大なショッピングモール「テラス・モール」にあるシネマ・コンプレックスで「わが母の記」と云う映画を観た。

井上靖の原作で、老いてやや認知症が診られる母親を兄妹でケアする物語である。ボケて我儘になってきた母親に手をやきながらも、親子の情を失わず最後まで看とる話で、映画が終わりスタッフやキャストのタイトル画面が続く間も、観客は誰一人席を立たず、心穏やかに余韻を楽しんでいた。

この映画には客船が出てくるが、見たことのある船だと思っていれば、タイトルでそれが我が「にっぽん丸」であることが判り、嬉しかった。

映画で、老いた母が、私はもう姥捨山に行きたいという気配を見せるころがある。深沢七郎の楢山節考の愛読者と云うより信者となっている私は大変興味を持った。そして井上靖の作品の中に「姥捨」と云う短編小説があることを知って驚いた。

数日前、近くのブック・オフに立ち寄って、井上靖の「姥捨」を買い求めた。カビ臭い古本に少し気持ちが悪くなったが、文庫本で二五頁ほどの短編である。最近目が悪くて殆ど本を読まなくなった私だが、これはすぐに読み終ることが出来た。井上靖がなぜ姥捨伝説に興味があるのか、解説を読んで判った。作者の一族の中に「姥捨」の血が流れているというのである。それは、井上家一族の生き方の中に、「出家遁世の志」とでもいうべき現実離れの願望があるというこのようだ。子が親を捨てると云う冷酷な「棄老」の思想ではない。彼の曾祖父は、初代軍医総

監の松本順の門弟で、若いのに三島の県立病院の初代院長を務めた程の人物であったが、四〇歳になるやならずで、一切の公職をなげうって、郷里に退き開業医となった。父親も五〇歳にならぬうちに軍医の職をひいて郷里の湯ヶ島に引きこもったと云う。

高齢化社会がすめば、現在では三人の現役が一人の老人を支える騎馬戦型の人口構成が、二〇五〇年には働き手一人が一人の高齢者を支える肩車型になると云われている。これでは、健康保険をはじめ社会保険の積立金は殆ど高齢者が使ってしまうことになろう。このまま推移すれば、我が国としての社会保険制度が成り立たなくなってしまうのは明らかである。

神様は、親が子を育て一人前の人間になるよう、人間をプログラムされ遺伝子に組み込まれたが、自分が自分の人生を犠牲にしてまで、育てられた年月以上の長い間、親の面倒を見るように創られていないと思うのである。だからと云って、現代に姥捨山を作れと言っているのではない。子は冒頭に書いた映画のように、出来る限り愛情を持って親の介護をするのが人情であろう。しかし親自身は、子や孫に面倒掛けるのではなく、自分で己の人生の幕引きが出来るよう心がけていきたいと思う。

私は大学時代に読んだ「檀山節考」の主人公おりの生き方に魅かれる。現代の檀山が何処にあるかまだ見つかからないが、年相応に生きていきたいと思う。責任ある仕事は若い人に任せ、健康の維持に努め、自分の出来ることを、仲間と楽しみながら、やり遂げていきたい。

師匠の妹・康枝さんに頂いた、ホイヴェルス神父の「最上のわざ」という詩は

「この世で最上のわざは何？／楽しい心で年をとり／働きたいけど休み／（中略）」



神様は最後に一番よい仕事を残して下さい。／それは祈りだ。／手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。／愛するすべての人の上に神の恵みを求めるために。／すべてをなし終えた臨終の席に神の声を聞くだろう。／『来よ 我が友よ 我は汝を見捨てじ』と

私はこの詩が気に入って額に入れ書斎に飾っている。さて、最後まであまり稽古に励まないうだらな門弟で、一向に上達しなかった私を、暖かく二十数年間もご指導頂き、お付き合頂いた布詠師匠と美紗の会の皆さん、本当にありがとうございました。私はまだ檀山にはこもりませんが、昨年の秋の発表会を以って、美紗の会を辞め、邦楽とはお別れすることといたしました。

西松布詠師匠を人間国宝にすると心に誓ったことも果たせず、引退しましたが、名取の皆さんはじめ、次に控える有能な門弟の方々の益々のご活躍とご発展を心から祈念して引退の挨拶とさせていただきます。

## 姨捨山伝説によせて

西松布詠

桜の開花が待たれる三月末に一本の電話依頼があった。「かたせ梨乃主演の湯けむりドクター」『信州・姨捨山伝説』の歌詞を作曲・演奏していただけませんか？と。その声は水谷俊之監督だった。彼は映画監督・脚本家・シナリオ作家として活躍しており音楽や歌舞伎にも造詣が深く以前から梨乃さんと共に私の演奏舞台に御越し下さっていた。

果たして私にその任が務まるかしら・・・と躊躇したが、くしくも先日届いた本郷氏の挨拶文に「姨捨」の二文字があったことから何やら不思議な縁を感じた。美紗の会に二十数年在籍下さった本郷公基氏が稽古の脱会を申し出た時、常々口にされていた「自己利他」の思想や「檀山節考」の主人公おりの潔い身の処し方の時が訪れたのだろうと寂しい気持ちを抑えて領いたことを思い出す。又高校時代訪れた四季折々の信州、なかでも夏休みに姨捨伝説の舞台となった冠着山の田毎の月の風景をなつかしく思い出し、貧しさゆえ苦しい選択を強いられる親子の哀しみを三味の音ににじませるべく台本と共に黄金週間に多くの時間を費やした。

五月十八日。長野新幹線の長野駅を降り長野電鉄に揺られ、湯田中駅からロケバスで旅館に着いた時すでに陽差しは翳っていたが、まだロケ隊はそでの撮影が終わらずあたりはひっそりとしていた。三味線の調弦をすませ、近くを散策すると平安時代の起源という信州の朽ちた大木を「轆轤・ろくろ」を使い盆やお椀を作っている店に行き当たった。今晚、旅館でのドラマの宴会シーンにエキストラで行くと

いう親父さんのおしゃべりに地元の暖かい応援が感じられ、寒さにちびんでいた心がほんわりと温かくなった。

演奏の録音は前もって撮影前の宴会場で済ませ、ようやくホテルに着いたのは深夜十時過ぎ。そして本番は翌朝五時起床というハードスケジュール。日頃何気なく観ているドラマもこうして多くのスタッフの尽力が集合して一つの作品が生み出されてゆくのだ・・・と初めて参加する私は明けても暗い朝の冷気に引き締まる思いで現場の神社に向った。

前夜の雨でぬかるんでいる地面にシートが敷かれ地元の方々が子供芝居の応援に来た両親や親類縁者に紛して二コ二コと座っており、境内の背景に白幕が張られた舞台では子役が演技の指導を受けている。陽差は明るく眩しいほどだが、石段下の日陰に座る私の撥を持つ手は寒さと緊張に震える思い。子役は素足でさぞや・・・と同情しているうちに雪の降る山道を老いた母親を背負う息子のシーンが始まり、前夜の音に合わせながらの演奏にお互いの息を合わせてゆく。「親と決まりははずれが重い、かけて思いははかりなや」と唄うカットに容赦なくカチンコのスタート合図の繰返しに思わず手に汗握るほどだった。

私の出番はこうして終わり、昼時にはすっかりあたりは皐月晴れに包まれようやく開放された気分になった。前夜これがよく聞かずに「口ケ弁当」かと箸が進まなかったのに、出番が終わった途端、心尽くしの山菜や味噌汁の振る舞いもあり恥ずかしいほど旺盛な食欲だった。

梨乃さんたちはまだまだ逗留せねばならず、ねぎらしいの挨拶もそこそこ我々は帰途へと湯田中駅に向った。  
せつかく来たのにまだ温泉も入ってなかった・・・と駅前温泉「楓の湯」に身をゆだね暫し旅人気分を



味わった。すつかりのんびりと人気がない一茶の散歩道をさまよっていると「三絃の撥で掃きやる霞かな」の句碑にぶつかった。湯田中温泉はかつては有名な温泉地で芸者の数も多かったことだろう。  
一茶の聴く三味線はどんな音色だったのだろうか：と突如湯けむりドクターの先ほどのシーンを思い出し、どうか心に残るドラマに仕上がって欲しいと切に思った。

長い長い坂を左右にゆつくりと車でスロープを描きながら小高い丘に辿り着く。眼下に咲き誇る白い林檎の花、背丈程の可愛い樹木が風に身を任せ、村の人々がお喋りを楽しむかのように見える。桃源郷とも言える湯けむりドクターの村は、ここ山ノ内町の上に浮かんでいる。町の皆様の温かなお心とご協力に感謝して六作目の放映が待ち遠しい日々である。

山ノ内町の皆様いつも有難うございます。  
(かたせ 梨乃)

《今後の予定》

- 七月一日(日) 午後四時開演  
飯田橋・津久戸町 おおさこい
- おおさこの粹・江戸唄と酒のついで
- 七月四日(水) 夜九時放映 テレビ東京  
「湯けむりドクター」
- 華岡万里子の温泉事件簿
- ⑥ 「信州・姨捨山伝説殺人事件」
- 七月十四日(土) 午後二時開演  
芝浦港南区民センター
- 粋なおはなしー江戸・上方粋くらべ  
上方唄 三川美恵子 舞 山村若光子  
江戸唄・地唄 西松布詠 踊り 花柳千寿艶
- 八月二十六日(日) 午後三時開演  
第五回粋艶会ゆかたざらい
- 岐阜 かわらや大広間

■ たより 第72号

発行者 美紗の会  
編集責任者 大久保 朋子  
デザイン 近藤 幹則  
■ 美紗の会  
主宰 西松 布詠  
稽古場 港区白金台三ー一ー二  
白金台ブレイス三階  
電話 (三三四一)ー一七二六  
(五四四七)ー一四一一  
E-mail : nfu@soleil.ocn.ne.jp  
URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misa5